終戦

私の履歴書

司憲　庵久栄

⑧

昭和十九年（一九四四年）七月、針尾分校は空襲が激しくなったので、山口県の海兵防府分校に移転した。戦局は急を告げ、本土決戦に備え七十八期は「七八まし部隊」と名付けられ本土防衛の一員に加えられた。いわば海軍陸戦隊である。真剣による抜刀術演習、小銃や軽機関銃の演習も極めて身近になった。

ある時、島影から猛スピードで飛び出してきたモーターを仕掛けて敵艦に体当たりする特攻兵器だと聞いた。

終戦直前、兵学校出身の分隊監事が戦況について「諸君、わが海軍は丸通になった」と言った。戦う軍隊ではなく、モノを運ぶ運送会社のようになったという意味だった。

終戦から復員にかけての経緯は先に触れたが、広島の戒善寺が焼けてしまったため、

広島の寺再建、父他界

自分の道が定まらず悩む

我々家族は父の姉のいる福山市の鞆に移った。私は東京の五中に戻りたかったが、こうした状況ではそうもいかず、福山誠之館中学（現広島県立福山誠之館高校）の四年に編入することになった。

鞆は瀬戸内に面した風光明媚なところで、朝鮮半島からの使節団が上陸する折の宿泊地の一つだった。言ってみれば瀬戸内の海の中の島だ。

私が「鞆はきれいだ」と言ったら、父が「自分のものだと思ったらもっときれいに見える」と言った。最近になってその意味がわかった。地球を自らのものと心得た時に初めて地球を意識し、その美しさを守ろうという気持ちになるのだと。

誠之館中学の前身は福山藩の藩校。私は精神的にあいまいな状態にあったが、親切に接してくれた友人が何人かいた。その一人が鹿島守之助氏の甥で八重洲ブックセンター前会長の河相全次郎君だ。

昭和二十一年夏、父は広島に出かけ、生き残った檀家さんと相談して、お寺の跡に二間に台所が付いた白壁の小屋（寺）を建て、年の暮れに家族はそこに引っ越した。

焼け跡に父が建てた白壁の小屋

翌二十二年の一月六日に亡くなった。父は自分の最期が分かっていたのだろう。だから自分が住職をする寺で死にたかったのだと思う。

死ぬ一日前、父が浄土宗の高祖「善導大師が夢に出てきた」とにっこりほほ笑んだ顔が忘れられない。父のコダックのカメラを広島駅前の闇市で交換したのが、米国製のパヤリース・オレンジジュース一本。それを持って帰ったら父が、「パヤリースか。こういうものが日本にもあるのかね」とおいしそうに飲んだ。その夜、息を引き取った。

父の葬式を済ませてから、されて過去帳を頼りに檀家を訪ねて歩く仕事が始まった。母が写真や過去帳などを実家に保管していたので、原爆による焼失を免れたのだ。

父は仏教を新しい解釈で布教していたつもりだろうが、私にはそうは思えず、いらいらして自分の道が定まらない。そんな時に親類から持ち上がった話が、お寺を再建して継がなければいけない立場だから「慈円を仏教専門学校に入れろ」だった。

京都にはハワイから帰国した時に寄った経験があり、戦争で焼け残った京都には興味があった。完成した町に憧れがあった。広島の原爆の焼け野原に夕日が差した時、実はシルエットとして重なって見えたのが東寺や本願寺などの姿だったのだ。

（インダストリアル・